

研究助成実施報告書

助成実施年度	2019 年度
研究課題（タイトル）	都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究-利用者と運営者 視点より
研究者名※	早川 礎子
所属組織※	小田原短期大学 通信教育課程 特任教授 (山村学園短期大学 専任講師)
研究種別	研究助成
研究分野	都市環境工学
助成金額	118.4 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

() は、報告書提出時所属先。

大林財団2019年度研究助成実施報告書

所属機関名

山村学園短期大学

(申請時：小田原短期大学)

申請者氏名

早川 礎子

研究課題	都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究-利用者と運営者視点より
<p>(概要) ※最大10行まで</p> <p>都市公園を見れば、その地域の印象が見えてくる。公園は憩いの場であり、親子の遊びの場でもありながら、街の景観の一つであり、その地域の文化や美意識を反映している場所でもある。また子育て支援機能を有しており、広場や遊具等の整備等により、その機能を保持してきた。</p> <p>本研究は、全国に展開している都市公園におけるプレイパーク（「プレーパーク」「冒険遊び場」とも示される）を特定の地域に限らず東京のベッドタウンである埼玉県、千葉県、神奈川県を横断的に研究の対象とした。子どもたちの身近な遊び場の必要性について横断的な方法で質問紙調査（①利用者向け、②運営者向け）を行った。また感染症対策を講じた上での観察調査を行った。</p>	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
<p>以下の4点を研究の目的として質問紙調査及び観察調査、文献研究を行った。</p> <ul style="list-style-type: none">(1) プレイパーク（冒険遊び場）の未就学児の利用状況(2) プレイパークへ対する様々な想いの横断的比較研究（利用者・運営者）(3) これからのプレイパークの方向性・あり方(4) プレイパークに介在する諸問題とその解決方法	

2. 研究の経過	(注) 必要なページ数をご使用ください。
<p>本研究の調査対象地区は、神奈川県、埼玉県、千葉県の認定こども園、保育所、幼稚園を対象とした関係もあり、新型コロナウイルス予防対策、緊急事態宣言の影響を大きく受けた点は否めない。またプレイパークへの参与観察などの観察調査も最小限にとどめた。その代替として、プレイパーク開催している都市公園、開催していない都市公園・児童公園を観察調査の対象とした。その結果、新たな知見を見出すことが出来たのではないかと思われる。</p> <p>2-1. 未就学児の利用者（保護者向け）の調査対象者の抽出</p> <p>【第一段階】</p> <p>①選定方法</p> <p>質問紙調査の対象保育園の選定にあたっては、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県及び各政令</p>	

指定都市がまとめた認可保育園、認定こども園（幼稚園）、幼稚園一覧表より、無作為抽出を行った。最終的には、1都3県（一部他道府県あり）計200カ所の保育園、幼稚園、認定保育園に研究協力依頼を行った。当初は、100カ所程度を想定していたが、1都3県の保育園、幼稚園などの施設数も相当数あったため、何度も抽出を繰り返した結果と、想定される最終調査協力率30%程度より200カ所前後の依頼が相当と判断をした。

②依頼方法

依頼方法は、文章で企画趣旨を伝え、協力の可否を尋ねた。送付資料は、依頼状、返信用封筒、返信用回答書を郵便で送付した。また回答率を上げるため、紙媒体での回答のみではなくGoogleフォームを活用、QRコードからWEBアンケートに参加できるように工夫を行った。

③第一段階の回答状況

第一段階の回収率は、80%程度（160施設）と想定をしていたが実際は26.5%であった。第二段階の調査協力施設は、30%（45～50施設）と想定していたが実際は26.4%であった。しかし、うち3施設が2020年10月辞退の申し出があった。

④辞退を受け、再依頼

依頼状配布13カ所の保育施設を対象に2020年10月6日に投函、10月20日までの2施設（返信率：15%）であった。回収先の内1施設（140部）、協力快諾を得た。

【第二段階】

⑤本調査依頼

第一段階において、研究協力の確認ができた施設に質問紙の必要部数を確認の上、予備分と合わせて送付した。質問紙はA4判1枚、3分程度で回答ができる内容にとどめている。また回答は、紙媒体の他、Googleフォームのアンケート機能を活用しWEB回答（QRコード設置）も可能とした。回答方法は、利用者（保護者）が2種類から自由に選択を可能とした。

⑥回収方法

紙媒体の質問紙は各施設に配布及び回収をお願いした。返信用封筒として、レターパックライトを同封した。WEB回答は、返信用封筒での返送は不要とした。

⑦WEB回答の施設の特定

謝礼送付の関係上、回答施設の特定として番号を設定するなどを考えたものの、特定の施設からの回答として見られる不安を考慮し、性善説に基づき、第一段階で協力可とした施設に対して、謝礼送付を採った。これによって、バイアスなく調査結果を見ることが出来た。ただ、利用者に配布していない等といった施設側からの自己申告もあった。

2-2. 冒険遊び場運営者・団体の抽出

①情報収集

“プレイパーク”を検索した際に、地域単位、全国単位で総括している団体があることが分かった。「特定非営利活動法人 横浜にプレイパークを創ろうネットワーク（以下「YPC」）（<https://www.yokohama-playpark.net/>）」、全国規模でみると「非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会（<https://bouken-asobiba.org/>）」、「非営利団体 冒険遊び倉庫（<http://www.bouken-asobi.com/index.html>）」より情報収集を行った。

②抽出方法

YPCに協力依頼及びネット上の情報を頼りに関東甲信越地区より70団体に調査依頼を行った。

③調査方法

WEB又は、質問紙調査を実施した。

(3) 参与観察の代替調査

新型コロナウイルスの影響で、3密回避の観点より、人との接触を避けるため当初の計画では参与観察を行う予定であったが中止し、第二次調査(写真や配布物の提供)の依頼を第一次調査の質問項目に記載し可否を訊ねた。

3. 研究の成果

(注) 必要なページ数をご使用ください。

3-1. 質問紙調査-基本調査データ

(1) 結果

①利用者側

プレイパークの利用状況に関して(N=503)「はい(16.3%)」「いいえ(83.7%)」であった。(2)横断的調査データの比較は、利用している(「はい」と回答した16.3%が対象)を選択した者のみ回答を得ている。なお紙媒体での回答の際に「いいえ」を選択した者も回答をしていたが、これは手作業での入力の際に外している。

利用頻度については、「年1-2回(30.2%)」「月1-2回(25.6%)」「月1回(18.6%)」「年3-4回(16.3%)」であった。

②運営者側

運営にあたっての費用の支弁について(複数選択)「行政からの補助(76.9%)」「寄付(61.5%)」などであった。運営にあたって必要と思うことについて(複数選択)「人員(無償)76.9%」「運営費(69.2%)」「人員(有償)38.5%」であった。イベント開催の情報発信の方法は、「掲示板(69.2%)」「サイト(61.5%)」「SNS(46.2%)」などであった。

利用料金について「無料(100%)」「必要に応じて(15.4%)」と原則無料であるが状況や遊びの種類によっては費用が発生している。遊びの提供に関しては、自然関係を目的とし「水遊び(92.3%)」「焚火(76.9%)」「植物(69.2%)」「どろんこ(53.8%)」、人間関係を目的として「友達(69.2%)」「ごっこ遊び(53.8%)」、遊具遊びとして「ぶらんこ(76.9%)」「変わった遊具がある(61.5%)」、ものづくりとして「食べ物を作る(92.3%)」「ものづくり(92.3%)」「物が壊せる(30.8%)」であった。次に遊びの空間性について「凸凹している(66.7%)」「広い(50%)」「想像力が高められる(25%)」、特定の時期を対象とする行事について「焼き芋(75%)」「キャンプファイヤー(16.7%)」「流しそうめん(16.7%)」「芋ほり(8.3%)」「落ち葉プール(8.03%)」であった。

(2) 分析

プレイパークの利用者は、想定以上に少ないことが分かった。利用頻度を見ても頻繁の利用が困難であることが伺えられた。

プレイパークの運営者側に対する調査では、費用面の課題が大きいように思われる。観察調査で行政からの補助金は、プレイリーダーに対する人件費に賄われることを聞いた。また保護者スタッフにあたっては、一方を有償とし、他方を無償とするとトラブルの原因になることを懸念し

ていた。遊びの種類については、道具を使わずに創造性を持って取り組める遊びが主となり、命の大切さを体感できる（例えば、「芋ほり」等）体験型の遊びとなっている。

情報発信に関しては、後述（6）で開催している公園を調査した際にプレイパークに関する情報が目に付く場所に掲げられていたのは、子どもの森（千葉市）、県立青葉の森公園（千葉市）、港南台プレイパーク（横浜市）であった。ネット情報に関してはNPO法人横浜にプレイパークを創ろう（以下「YPC」）において、頻繁に更新がなされていた他、Facebookを活用・情報発信（例えば「中央林間ツリーガーデン（緑野原子ども広場）運営委員会」「まんまるプレイパーク（都筑冒険遊び場）」等）、メール配信を活用・情報発信（例えば「俣野プレイパーク」等）が挙げられる。Twitter、Facebook、Instagram等は、登録をしないと情報を得ることが出来ない。プレイパークへの認知度に関しては、後述（5（1））の通り、「知らない」を選択する者が多いように、広報・情報発信が求められてくるように思われる。

3-2. 横断的調査研究調査結果と分析

横断的調査として双方に同様の旨の質問を行った。しかし、前述のように運営者側への調査サンプル数が非常に少ないため、結果として十分とは言えないように思われる。

調査研究データの詳細は、小関慶太『研究報告書 都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究—利用者と運営者の観点より—』（2021年9月）発行を参照されたい。

(1) 結果

プレイパークを利用しない理由(①)は、利用者側(N=418)「知らなかった(79.4%)」「子どもの年齢が低い(13.4%)」「安全性に不安があるため(4.1%)」「興味関心がない(1.4%)」に対して運営者(N=9)が利用者にはなぜ利用しないかの設問に対して「興味関心がない(100%)」「事故などの不安を抱えている(22.2%)」「防犯・防災への不安を抱えている(11.1%)」であった。

プレイパークに何を求めているか(②)は、利用者側(N=85)「チャレンジ精神の向上(75.3%)」「好奇心の向上(75.3%)」「生き生きしさ(55.3%)」「主体性(36.5%)」「協調性の習得(36.5%)」「社会性の習得(15.3%)」「保護者間での交流(2.4%)」に対して、運営者側(N=13)が利用者に身につけて欲しいことは「生き生きさ(61.5%)」「主体性(53.8%)」「好奇心の向上(53.8%)」「チャレンジ精神の向上(53.8%)」「協調性の習得(30.8%)」「保護者間の交流(30.8%)」であった。

プレイパークの魅力(③)は、利用者側(N=84)「子どもが楽しそう(88.1%)」「身体を動かせる(84.5%)」「無料(56%)」「健康的(50%)」「異年齢との関り(19%)」「保護者間の交流(6%)」に対して運営者側(N=13)は「子どもが楽しそう(84.6%)」「保護者間の交流(84.6%)」「無料(39.2%)」「異年齢の関り(69.2%)」「健康的(61.5%)」等であった。

プレイパーク利用にあたっての不安(④)は、利用者側(N=85)「遊具などの事故(64.7%)」「子ども間での事故(58.8%)」「不審者情報(22.4%)」「保護者間の人間関係(3.5%)」であった。運営者側の設問は、プレイパーク開催中の事故が発生した際の対応方法に対して訊ねた。これまでの事故の経験に関しては「あり(76.9%)」と回答を得た。発生件数(N=10)は「年1回(50%)」「年6回(20%)」であった。またプレイパークの近隣での不審者情報についてどのように扱われているかについて(N=13)は「運営者での情報共有(69.2%)」「所轄署と情報共有(38.5%)」「運営者・利用者間で情報共有(30.8%)」であった。

自分の責任で自由に遊ぶ点についての考え方(⑤)について、利用者側(N=86)への設問は、プレイパークに関するサイトや資料を見てどのように考えるかの回答「遊びを通して“危ない”“やってはならない”ことを学習さ

せてあげる(79.1%)」「子どもの監督を保護者に委ねている(27.9%)」「子どもの遊ぶ権利を保障している(22.1%)」「主催者側の責任回避(9.3%)」に対して運営者(N=13)は「遊びを通して“危ない”“やってはならない”ことを学習させてあげる(38.5%)」「子どもの遊ぶ権利を保障している(76.9%)」であった。

認知度及び期待度に関して(⑥)、前述(①)は利用していない者を対象としているが本項目は利用者を対象にしている。利用者(N=86)の今後のプレイパークの活用に関して「活用していきたい(96.5%)」であった。また期待度に関しては「非常に期待している(26.7%)」「期待している(39.5%)」「現状維持(32.6%)」であった。運営者(N=13)に対しては、地域社会との関係性が希薄化しているか体感について「希薄化している(30.8%)」「親密化している(15.4%)」「わからない(53.8%)」と回答を得た。また地域連携についての取り組みに関してどのような活動をしているかについて「地域のイベントに参加(69.2%)」「公園の清掃活動(30.8%)」「防災活動(15.4%)」「防犯活動(7.7%)」「防犯パトロールへ参加(7.7%)」、地域からプレイパークの認知度に関しては「わからない(100%)」であった。最後に、持続的可能なプレイパークは必要かに対して「思う(84.6%)」「わからない(15.4%)」と回答を得た。

(2) 分析

調査結果より、(①)プレイパークの認知度に関して利用者の多くが「知らなかった(79.4%)」に対し、(⑥)においても運営者側の回答が「わからない(100%)」であるようにまだまだプレイパークの存在が十分に認知されていないように思われる。他方で運営者側は、利用者に「興味関心がない(100%)」としているところがネガティブな評価となってしまう。

(②)でそれぞれのプレイパークに求めていることの子どもの内在する点は量的にも同等程度である点より、「興味関心がない」では非常に損をしているように感じられる。(②)の項目で利用者との運営者の相反する回答として「保護者間での交流」に関して、横浜市港南プレイパークで観察調査(2020年12月実施)より親同士の関係性も深く、子どもが遊んでいる横で情報交換(井戸端会議)や一緒に遊んでいる様子を窺うことが出来た。運営団体によっても異なっているのかもしれない。不安(④)に関しては「保護者間の人間関係(3.5%)」とあり、昨今の地域社会の人間関係の希薄化が影響しているように分析される。

魅力(③)に関して、大きな相反関係にあるものとして「異年齢との関り」「保護者間の交流」であり、利用者側は、求めているが、運営者は求めているようだ。この点は非常に難しく、特に前者に関しては不安要素として(④)、年齢別・発達段階別の遊び方によって遊具の使い方も異なってくる。

不安(④)、プレイパークにおける事故件数に関して、どの程度の事故(・怪我)あるかは、回答者によって異なるかと思われるが、年1回程度が半数を占めていた点に関しては、疑問が残った。また不審者情報の取り扱いに関しては「運営者での情報共有(69.2%)」「運営者・利用者間で情報共有(30.8%)」について、前者が70%近い点に驚かされた。(①)の利用者が「安全性に不安がある(4.1%)」や(④)「不審者情報22.4%」に不安を持っていることが納得できた。

自分の責任で自由に遊ぶ点(についての考え方(⑤)では、利用者「遊びを通して“危ない”“やってはならない”ことを学習させてあげる(79.1%)」に対して運営者(38.5%)、利用者「子どもの遊ぶ権利を保障している(22.1%)」に対して運営者(76.9%)と利用者が求めている点は、「遊びを通して痛みや人間関係を学ぶ」ことを第一に、これに対して運営者は法的根拠として子どもの権利条約31条に基づく遊びを第一に考えている。

また利用者は、「子どもの監督を保護者に委ねている（27.9%）」「主催者側の責任回避（9.3%）」との回答の背景には、認知度並びに理解度が十分ではない背景があるように分析される。

3-3. プレイパークが設置できる都市公園の特徴分析

本研究では、プレイパークが開催されている公園及び、プレイパークが行われていない公園を観察調査の対象とした。なおプレイパーク開催の可否に関しては、行政やNPO法人が配布している資料に基づき調査対象とした。その関係上、資料配布時は行われていても現在は開催していない公園も対象となっている。感染症対策の観点より実際の開催中に訪問した場所は、横浜市港南区港南台プレイパークのみである。

(1) 調査対象のプレイパーク開催公園

千葉県内は、銚子市東部不動ヶ丘公園（C1）、いすみ市日在浦海浜公園（C2）、千葉市御成台公園（C3）、千葉市子どもたちの森公園（C4）、千葉市千葉公園（C5）、千葉市おゆみ野の森・ふれあい公園（C6）、千葉市有吉公園（C7）、千葉市大百池公園（C8）、千葉市幸町公園（C9）、千葉市ほほえみの公園（C10）、千葉市幕張西第一公園（C11）、千葉市県立青葉の森公園（C12）である。神奈川県内は、小田原市南鴨宮富士見公園（K1）、横浜市県立三ツ池公園（K2）、横浜市港南台中央公園（K3）、横浜市鴨池まんまる公園（K4）である。静岡県内は、富士島田公園（S1）である。

その他、新潟県赤城コマランド（長岡市）、岩手県盛岡中央公園（盛岡市）、静岡県物見塚公園（伊東市）を調査の対象と考虑していたが、新型コロナウイルス（covid-19）対策の関係上、断念をした経緯がある。

(2) 調査対象のプレイパークが開催されていない公園

千葉県内は、千葉市を中心に全域（館山市、南房総市、野田市、我孫子市等）約80カ所を観察した。神奈川県内は、横浜市及び川崎市の公園を中心に約30カ所観察した。その他、東京都内の公園は千葉県に隣接する地域の一部の公園を調査の対象とした。調査データは小関（2021報告書）に掲載した。

(3) プレイパークが開催される公園の要素の分析

観察調査、資料研究よりプレイパーク（冒険遊び場）が開催される公園には、環境的要素、運営的要素、セキュリティ的（安全安心）要素、地域社会の理解的要素があるように分析される。

第一に環境的要素は、公園の置かれている環境に注目し「里山」「自然が豊か」「教育的環境」「居場所」「遊具」等が挙げられる。

第二に運営的要素は、「資金面」（行政のサポート）「人的資源」（運営者、ボランティア、プレイリーダー）「利用者家族の協力」「道具の常設化・保管」（行政支援）等である。第三にセキュリティ的要素として「子どもの安全性」（適切な事故対応）「保護者の安心」「周囲の安全安心」（不審者情報の共有、事件・事故防止への取り組み）等である。第四に地域社会の理解的要素は、遊びの種類への理解として「焚火」「どんと焼き」（火を使うこと）「芋ほり」（場所の提供）「騒音」（子どもの叫び声、遊具の滑車の音等）「他人への関心度、人の動き」（人間関係が希薄化する現代社会において外部からの他者が来る）「道具の常設化」等である。特にこの点に関しては、今後の課題にもつながってくるが「公園とは、」の課題にも関わってくる部

分である。公園は、社会的弱者の場所とされているように老若男女が使う場所であるが、近時の動向を見ていると特定の対象者の場所であり、利用者間における価値観の異なるものを排除する動きがある。さらに第五としてそれぞれの都市公園が持っている資質的な側面もある。ここでいう資質的とは「広場の広さ」（砂地、芝生）「遊具」「基地が作りやすい」「道具の常設可否」「使いやすい」「監視性・領域性の担保」等が挙げられる。

観察調査より第一から第四に示した要素の内、2つないし3つが当てはまり、さらに第五の「公園の資質性」が加わっていると分析される。プレイパーク（冒険遊び場）が開催されていない公園は、運営者の人的資源や地域の理解などが背景にあるように思える。

【分析表】

種類	記号	要素 所在地/項目	環境的要素		運営的要素			セキュリティ的要素		地域社会の理解的要素			公園の資質性 面積
			里山	自然量	人的資源	資金面	道具の常設	監視性	領域性	火の使用	騒音（場所的）	人の動き	
開催されている公園	C3	若葉区	×	○	○	-	-	○	○	-	大通り	-	広い
	C8	緑区	◎	◎	○	-	-	△	△	-	大通り・住宅街	△	広い
	C9	中央区	×	○	○	-	-	○	○	-	大通り	-	広い
	C10	緑区	×	×	○	-	-	○	○	-	住宅街	-	やや広い
	C11	美浜区	×	△	○	-	-	○	○	-	大通り	-	広い
	K3	港南区	×	△	◎	◎	◎	△	○	○	大通り・線路脇	△	狭い
	K4	都筑区	○	◎	◎	◎	-	△	△	-	大通り・住宅街	△	やや広い
	S1	富士市	-	◎	○	-	◎	△	△	-	川沿い・工業地帯	-	やや広い

注) ◎特に感じる ○感じる △どちらかといえば -不明

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

4-1. 研究を経て

これまで狭い地域での横断的調査研究はあったものの、広域を対象にした研究がなかったため、本研究の有意性が高いものと考えられる。研究調査結果より、想定以上にプレイパークの存在が知られていない、また利用者側がどのような不安を抱いているかを知ることが出来た。

研究成果報告書（非売品）を協力していただいた認定こども園、保育施設、幼稚園、運営団体へ頒布することで情報の共有を通してそれぞれの場での子どもの最善の利益につなげることを期待している。

4-2. 今後への想いと課題

本研究では、利用者調査の対象が首都圏3県を中心に行ったが、次年度以降に継続的に研究費申請を行い全国規模の調査、地域ごとの比較より、子どもの権利条約に基づく公園の在り方について調べてみたく考えるきっかけとなった。

付記

本報告書は、共同研究者：小関慶太（八洲学園大学）が執筆した。
また研究成果は、小関慶太「研究論文；都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究—利用者と運営者の観点より—」『八洲論叢』創刊号、2021年9月発刊、1頁以下に掲載。小関慶

太「研究報告書；都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究—利用者と運営者の観点より—」（2021年9月発行、非売品）に詳細な研究成果をまとめた。

【別紙】

研究成果一覧

<学会報告>

・小関慶太（個人）「都市公園としてのプレイパークの横断的調査-調査紙項目設定過程」超異分野学会、関西フォーラム（2020.6.21）

・早川礎子・小関慶太・磯崎えり奈（共同）「都市公園としてのプレイパークの横断的調査-質問紙調査項目設定の過程」『こども環境学研究（16-1）』こども環境学会、長野佐久学術大会（2020.7.11-12）

※要旨・原稿作成 小関慶太

・早川礎子（個人）「プレイパークの利用者と運営者の視点からの横断的研究調査の意義-予備的な見地より」日本教育学会、神戸大学（2020.8）

※小関慶太・磯崎えり奈共同研究者名義を要旨集に記載

※要旨・ポスター作成 小関慶太

※書面報告

・早川礎子・小関慶太・磯崎えり奈（共同）「幼児の冒険遊び場を利用しない要因について-横断的調査データの解析」日本環境教育学会、オンライン（2020.8）

※要旨・原稿作成 小関慶太

・小関慶太・早川礎子・磯崎えり奈（共同）「未就学前の乳幼児がプレイパーク（冒険遊び場）を利用しない理由の分析-利用者と運営者の横断的調査結果より」（日本こども学会）2021.2

※サテライトセッション（ZOOM 報告）

※報告者：小関慶太

<学術論文>

・早川礎子・小関慶太・磯崎えり奈（共著）「研究論文；都市公園と子どもの遊び場の予備的研究-冒険遊び場を題材に」『小田原短期大学研究紀要（51）』（小田原短期大学）2021.3

・小関慶太（単著）「研究論文；子どもの遊びと環境の公園研究（1）-実地調査より遊具と子どもの遊び-」『八洲学園大学リカレント研究論集（1）』（八洲学園大学）2021.3

・小関慶太（単著）「公園における観察調査」『八洲学園大学リカレント研究論集（1）』（八洲学園大学）2021.3

・磯崎えり奈（単著）「研究ノート；冒険遊び場と学校教育の関係性についての一考察」『常葉大学造形学部紀要（19）』2021.3

・小関慶太（単著）「チャイルド・リスクマネジメントに対する 予防的教育の一考察 —保育者養成段階における実践的取組」『八洲学園大学紀要（17）』2021.3

・小関慶太（単著）「都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究—利用者と運営者の観点より—」『八洲論叢（1）』（八洲学園大学）2021.9

<学会抄録集論文>

・小関慶太「プレイパークの利用者と運営者に対する横断的調査-質問紙作成過程」超異分野学会関西フォーラム プログラム抄録集 40 頁収録（2020.6）

・早川礎子・小関慶太・磯崎えり奈「幼児が冒険遊び場を利用しない要因について-横断的調査データの解析」日本環境教育学会『報告要旨集』（2020.8）

※執筆担当：小関慶太

・早川礎子・小関慶太・磯崎えり奈「プレイパークの利用者と運営者の視点からの横断的調査研究の意義-予備的な見地より」日本教育学会『報告要旨集』（2020.8）

※執筆担当：小関慶太

・早川礎子・小関慶太・磯崎えり奈「都市公園としてのプレイパークの横断的調査研究-質問紙調査項目の設定過程」『こども環境学研究』（こども環境学会）（2020.9）

※執筆担当：小関慶太

・小関慶太・早川礎子・磯崎えり奈「未就学前の乳幼児がプレイパーク（冒険遊び場）を利用しない理由の分析-利用者と運営者の横断的調査結果より」『第17回 子ども学会議（学術集会）サテライト・ポスターセッション抄録集』（日本子ども学会）日本子ども学会（2020.12）

※執筆・ポスター作成・報告担当：小関慶太

・小関慶太（個人）「未就学前の乳幼児がプレイパーク（冒険遊び場）を利用しない理由の分析-利用者と運営者の横断的調査結果より」（超異分野学会大阪フォーラム 2021.4） ※新型感染拡大に伴い辞退（WEB版報告要旨集には掲載）